

はたらき人

沖繩信徒聖書学校
沖繩聖書神学校

沖繩県那覇市久米町
2の11 (〒900)
事務局
聖書学校
(電)09893(7)8988
神学校
(電)09889(7)6970

星の輝きは夜の暗黒が濃いほど美しい。この聖句の「曲った邪悪な時代」が、その暗黒の世を示す語である。

主イエスは「ああ、なんという不信仰な、曲った時代であろう」(ルカ九章四一節)ともあって、この時代が悪しき世であったことが語られている。

当時はロマ帝政の初期であり、初代皇帝アウグストの平和がとえられ、表面的には良き時代であるともいえた。

しかし帝政の内がわは、元老院を意のままに操縦し、傲慢奸計、

乱倫の行蹟があった。

今日私たちの周囲に「曲れる邪悪」なことは、次から次へと起っている。学校内暴力、家庭内暴力、非行児問題を始めとして、公害企業の責任回避、政治家の見識欠除と無節操、最近ではグリコ・森永事件等々、軽く上げただけでも、社会への不安と混乱と恐怖の原因を限りなく見いだすことができる。

更に人命の軽視、人間性無視の元兇として戦争を挙げることができ。中近東における戦争、また殺人が行われ、ある国々は消極的ながら、その一部に負担しているというのである。このように考える時、現代も曲れる邪悪な時代である。

さてこのような時代にあつて、私たちはどのようにすべきであろうか。

世が暗黒であればある程、光り輝くべきではないか。キリスト者のこの世における存在もまた同じ

でないだろうか。「曲った邪悪な時代のただ中であつて」とあり、また「彼らの間で星のように」とある。

私たちは神なき文化の中にあつて、没交渉的傍観的であつてはならない。主の執成と神の力に守られつつ、主の弟子としての証しを立ててゆくところに、信仰の意義があり、キリスト者としての使命が果されてゆくのである。

星の微光は太陽の光には消されているように見えるが、ひとたび暗黒にはいるやいなやその存在を現わしてくる。このように私たちは太陽の如き神の光の前には、無に等しいが、神はこの我らをも暗黒のこの世においては、その存在を全うすることを望んで居られるのである。

キリスト者は星たることに大きな誇りと確固たる使命観をもつべきである。

「あなたがたは、いのちの言葉を堅く持つて」とある。いのちの言葉とは、私たちを救い、永遠の生命を与える福音であり、十字架の言であり、神のことばである。さらに神の言に在すイエス・キリストである。

私たちの生活の中で、この事は具体的に、神の言である聖書に

「あなたがたが責められるところのない純真な者となり、曲がった邪悪な時代のただ中であつて、傷のない神の子となるためである。あなたがたは、いのちの言葉を堅く持つて、彼らの間で星のようにこの世に輝いている。」

(ピリピ二章一五節)



星のように輝き

沖繩聖書神学校々長

渡真利 文三

奉仕神学生について

桃原 俊幸

わが名護バプテスト教会に、神

様の偉大さが今までにたく迫ってきて、罪深い自分でも、何らかの分野で仕えさせていただけにだろつかという思いが出てきます。

時々、仕事で疲れて眠たくなりませんが、そんな時は授業の前に、コーヒーを飲んで、偉大な説教者であったムーデーが、若い頃、靴屋で働きながら、ギリシャ語をこつこつと学んでいたことを考えたりして、はげまされています。

また忙しい牧会の傍ら、愛の勞をとってくださっている、先生方に心から感謝しています。使徒行伝八章には、エチオピアの高官が聖書を読んでいて、「だれかが、手びきをしてくれなければ、どうしてわかりましょう」と言っています。聖書を読むには指導する人が必要です。

一緒に学んでいる兄弟姉妹にも、感謝しています。交わりの中ですばらしい証を聞かせていただいたに本当にはげまされています。

(那覇ナザレン教会員)

学生としては初めて、桃原俊俊兄が、四月から九月までの半年間、ご奉仕して下さいました。

最初の聖日は、礼拝後に教会のピクニックを予定しており、折からのどしやぶりで、天候が危ぶまれたが、午後からは、不思議なほどカラッと晴れて、青空が見えるので、計画どおり、行うことにした。那覇教会からお借りしたマイクロバスを俊政神学生が運転することになり、乗用車も二台使用して、総勢二十名ほどの参加となった。目的地は辺土岬。開通したばかりの宜名真トネルを通して、快適なドライブを楽しんだ。神学生にとっては、歓迎会を兼ねてのピクニックであったので、気楽であったかも知れないが、早速、運転の奉仕を依頼されるとは、思いも寄らないことだったろう。とにかく教会としても、初めてのピクニックで、運転手も与えられ、楽しく思い出に残る一日であった。俊政神学生は、家族で教会に出席した奥さんの栄子姉、三男一女の子供四名、又、母親(もちろ名、私の実母でもあるが)の計七名をひき連れての大家族である。特に、嬉しかったのは、偶像礼拝と知らずに、熱心に火の神(ヒヌカン)に香を上げていた母が、最初のうち

は、北部にドライブできるといわず、毎週、礼拝に出席して、メッセージを聞いているうちに、心を開き、キリストを受け入れたということである。実は、以前から母のために祈っていたのであるが、弟の神学生一家が名護に来ることによって導かれるとは、予想もしなかった。それで真地の実家に立ち寄った際、思いきって、火の神のウコール等を撤去して、代わりに十字架を置いてきた。母は何も言わず、祈りも、イエス・キリストをとおして捧げるようになった。ハレルヤ! 主に感謝せよにいら



名護バプテスト教会ピクニック

れない。ところで、俊政神学生の奉仕としては、毎週聖日礼拝の前に聖書研究会を担当してもらったが、なかなか好評であった。

八月の韓国百周年大会に当教会から、牧師を含めて十三名が参加したので、聖日は、俊政兄に説教していただき、大いに助かった。

半年間という短かい奉仕ではあったが、家族ぐるみの交わりをとおして、有意義で楽しいひとときを過ごさせていただき、感謝している。(写真は、最初のピクニックに行ったときの写真で俊政神学生は後列の左側から二番目、その前が母です。)

沖繩聖書神学校募集

▲受験資格

大学卒または同等の学力を有するもの。 沖繩信徒聖書学校卒業生

▲入学願書〆切 三月一六日 試験日 三月八日

十九日 午前十時

▲申し込み

那覇市首里石嶺四一 基督恩寵教会 運天康正 電話 〇九八八 八七・三九五九

第七回 クリスマス感謝会

★日時 1984年12月2日(日) 午後4時~6時
 ★ところ 沖縄祈禱院(首里石嶺オリブ山病院構内)
 ★主催 沖縄聖書神学校 (プログラム) メッセージ 国吉 守先生
 沖縄信徒聖書学校 あかし、劇、コーラス、学生一同、手作りの
 お菓子 卒業生、初めての方もぜひおいで下さい。

人であり、スネかじりはひとりもいない。女性の同期生で自家用車を持ち、交わりの時に捧げる祈りなど、ほんとに筋金の入ったクリスチャンもいる。教える牧師先生方も人間的な、インティメートなふれあいがあるが、やさしさの中にもきびしさがある。

聖書の奥深い教えと知恵、汲めどもつきない泉のように、私の信仰生活を高める聖句、ただ知識として学ぶのではなく、信仰の糧となるものを学び損取している。

旧約のモーセが十戒をアウフヘーベン(止揚)したが、新約のキリストの受肉と復活、そしてペントコステらしいの聖霊による救いであることを学んだ。そして、イエス・キリストのインカーネーション(受肉)の日は、クリスマスであることも学びとることができた。

今年の八月下旬、私はある人の人物伝を執筆し、すでに四年余になるが、その最後の原稿を書くため、生きた証人からききとる追跡調査のために、庵美大島の名瀬から鹿児島と旅行中も、懐しい兄弟姉妹や牧師先生方の顔の一つ一つが思い出され、早く復校したいと祈りかつ願った。そしてこの祈りの願いはきき入れられた。なん

と幸せなことであろうか。アームと幸せなことであろうか。アームと幸せなことであろうか。アームと幸せなことであろうか。

(那覇バプテスト教会員)

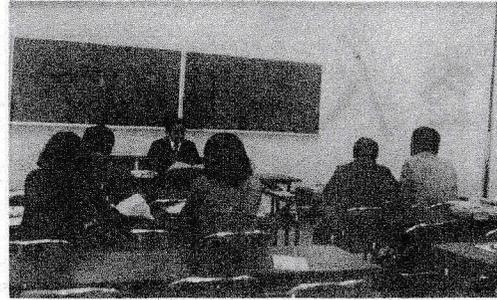
期待をもって学ぶ
 金城 あけみ

毎時間、期待をもって学ばせていただいています。実を言いますと、聖書の学びの分野がこんなに深く広いものだと言ったことを知りませんでした。

神の贖いの業を信仰をもって受けとめ、歴史的な理解、思想的な理解をふまえて、確認、あるいは弁証していく学びは、聖書の御言



- 葉を、より鮮明に浮かびあがらせてくれるので、とても興味深いです。聖書の学びは、それ自体、孤立するものではなく、自分の生活全体をもって聖書に従っていく、人間の全人格的な仕事であることを教えられました。
- 聖書の学びを続けていると、神
- 一九八五年度
 沖縄信徒聖書学校学生募集
- ▲募集人員 二〇人
 - ▲入学資格 新生の明確な自覚をもち、受洗後一年以上忠実な教会生活を送っている者。
 - ▲修養年限 二年(毎週火曜日、金曜日午後七時三〇分~九時)
 - ▲願書〆切 二月末日
 - ▲入学試験 三月十四日(月)午後七時
 - ▲科目 聖書・一般常識・小論文及び面接
 - ▲申し込み 沖縄市宮里二七七 新垣栄市 電七二八九八
- 将来信徒伝道者として、キリストと教会に仕えたいと願う者は、ぜひ本校に入学してください。



聞き従うことである。そしてみことばにふさわしい歩みができるように祈ることが必要である。またみことばをわけ与えることも怠ってはならない。キリスト者も怠ることばならぬ。互いに励まし合うことが大切である。

キリスト者がこの姿勢を堅く持つている限り、暗黒のこの世に対して、星の如く輝き、キリスト者の使命を果すことができる。(タニエル一・二・三参照)

四十七ぶりの学校

—母校早大と聖書学校を比較して感じること—

徳田 安周

私は四十七年ぶりに「学校」というものに入った。

昭和十二年四月、桜咲くランマンの春、私の入った学校は、「都の西北・早稲田の森」にあった。第二早稲田高等学院であった。予科の学校なので、角帽ではなく、丸帽で徽章は稲穂に「高」の字をあしらったものだった。

自分で働いたり、アルバイトで学資をかせいだわけではなく、親の仕送りや入学し、学生生活を送るという、まったくのスネかじりであった。

授業料は年間百七十円、下宿代が月二十四・五円だった。

執許からの仕送りは月に五十円、沖縄の新聞社の東京通信員をしていたので、その月給が十五円、早大新聞の編集委員手当が月に十円計七十五円、田舎の小学校の校長先生の月給よりも多くなり、学生としては過分な月収であった。生にもかかわらず、放蕩三昧をつ

くし、冬の寒い日に、下宿の部屋で新聞紙をかぶってガタガタふるえていた。ふとんを質に入れて、かぶるものもなかったのである。そんなときに、

「徳田さあーん、書留めでですよ」

と下から怒鳴る下宿のオバサン

の声が、天来の声のように響いた。こうして兵隊にとられる昭和十七年十月一日まで、私は親のスネをかじりつくした。

そして今年の四月、私は実に四十七年ぶりに沖縄信徒聖書学校に入学した。牧師先生の推薦もあり、入試も受けて入学することができた。

四十七年前の学校と今の学校とを比較して、その本質的な違いを指摘することによって、現在の学校の特色を説明できるのではないかと、思う。

聖書に登場する放蕩むすこのたとえ話を、私は魂の底からにじみ出る深い感動でとらえた。

こんなに罪で汚れ果てた私をも神はよるこんで迎えて下さるということである。

肉の世界での私の母校と、今の学校とを比べてみると、まったく月とスッポンの違いがある。第一に、学友の全員が、りっぱな社会

沖縄信徒聖書学校・神学校主催

聖書公開講座

—みことばの深みを求めて—

講師 小林和夫先生

講師の小林和夫先生は、1933年山梨県に生まれ、東京聖書学院卒業後、渡米、アズサ大学、トリニティー神学大学、ノーザンバプテスト神学大学院に留学。現在、日本ホーリネス学院牧師、東京聖書学院院长・教授。＊日時：1984年11月27日(火)午後7時30分/場所：沖縄福音会館